

令和8年度 愛知教育大学入学試験問題
標準的解答例または出題の意図及び評価の観点

【前期日程】

科目名：総合問題（学校教育科学専修）

【問題 I】

（出題の意図）

現在、小学校から高校にいたるまで、「論理的思考」を重視する傾向が諸教科にわたって存在する。そして当然ながら、大学での学びにおいても論理的思考は求められる。こうしたことから、論理的に思考するための基礎的要素として、語彙の言い換え（問1）、論理的思考の技法（問2）についての問題を設定した。また、論理的思考を遂行するにあたっては、「アナロジー（類推）」は頻度の高い技法である。出題に使用した文章では、経済原理／政治原理と論理的文章の組み立て方の関係をアナロジーを用いて論じている。著者が使用するアナロジーを読み解き、表現できるかを問う問題を設定した（問3、4）。

解答例

問1. 解答

- ① コストパフォーマンスが良い（「コストと効果のバランスが良い」「費用対効果が高い」「対費用効果が高い」でも可）
- ② 当たり前、当然、明白など

問2. 解答例

演繹的な推論：一般的な前提を個別の事例に当てはめていく推論のこと。

例：A湖ではオスの魚だけを養殖している。

この魚はA湖から出荷された。

したがって、この魚はオスである。

帰納的な推論：個別の事例を積み上げ、一般化された法則を導く推論のこと。

例：カラスAは黒い。カラスBは黒い。カラスCは黒い。

したがって、すべてのカラスは黒い。

問3. 解答例

経済の原理とは、効率的に最大限の収益を上げることである。その目的のために、複数の選択肢の中から最も効率的かつ費用対効果の高い手段を選ぶことが求められる一方で、手段そのものの道徳的・道義的な価値は問われない。アメリカのエッセイでは、最初の段落で結論となる主張が提示され、主張の論証に必要な事実を制限してコンパクトに論じることが求められる。「読み手を説得する」という

目的に向かっていかに効率的・効果的な文章の構造にするかが重要な点で、経済原理を反映したものであると言える。

問4. 解答例

政治領域では、公共の福祉という目的達成のために何が公共の福祉になるのか、社会を構成する多様な人々にとっての共通善とは何なのか、その目的自体を吟味し、その理念・理想に適った手段を選択する。理念の吟味には哲学的な考察が重要となり、理想の追求には理念に対する人々の合意が必要になる。ディセルタシオンでは、一般的な見方、それに反する見方、それらを総合する見方を「正-反-合」の構成で論じ、「正」と「反」の矛盾を「合」で解決する。ディセルタシオンで求められる論理的思考とは、一つの視点で押し通さず、それと反する視点を必ず思い描くこと、その対立の中から矛盾の解決法を探す点において、政治の原理を反映したものであると言える。

【問題Ⅱ】

(出題の意図)

クラス内での学力差や順位が生徒の学力に与える影響について、複数の実証的研究を踏まえて論考した文章を読ませ、研究の結果を正確に理解する力や、研究の結果をさまざまな観点から検討し、結果の解釈や結果の背後にあるメカニズムを思考する力、またそれを具体的かつ論理的に表現する力などを問う。

問1 解答

- ① : 6. 朱に交われば赤くなる
- ③ : 4. 類は友を呼ぶ
- ④ : 1. 鶏口となるも牛後となるなかれ

問2 解答例

- ・ 偏差値の高い学校は優れた人が多い。そして優れた友人から受ける影響は「良い」影響である (という前提)
- ・ 偏差値の高い学校は学力の高い人が多い。そして学力の高い人とともにいると、学力の高い人も低い人も学力が上昇する (という前提)

問3 解答

- ア : ピア (効果)
- イ : 井の中の蛙 (効果)

問4

【評価の観点】

- ・ 教師や生徒などの視点から、考えられる仮説（可能性）を複数挙げて、具体的に記述されているか、また、それらをわかりやすく表現されているかを問う。
- ・ 下記の解答例は、考えられる仮説（可能性）の例であり、複数の仮説（可能性）が記述されていれば加算して採点する（ただし、同じような仮説（可能性）の記述は加算しない）。

【解答例】

（教師に関する解答例）

- ・ 順位の高い生徒に対する指導や態度と、順位の低い生徒に対する指導や態度が異なるという仮説（可能性）である。具体的には、順位の高い生徒には、高い期待をかけ、授業でも積極的な働きかけを行ったり、熱心な指導を行ったりするのに対し、順位の低い生徒には期待をかけず、授業での働きかけが少なかったり、熱心な指導を行わなかったりすることで、順位の高い生徒と低い生徒の学力差が広がってしまう。
- ・ 順位の高い生徒と低い生徒に対する教師の指導の違いは、生徒の学力差をより大きくする可能性があるだけでなく、教師の期待は生徒に伝わり、順位の高い生徒は教師の期待に応えようと勉強に積極的に取り組むようになるのに対し、順位の低い生徒はやる気を低下させ、勉強に対して消極的になる可能性がある。その結果、長期的に見れば、順位の高い生徒の学力は上昇し、順位の低い生徒の学力は低下すると考えられる。

（生徒に関する解答例）

- ・ 順位の高い生徒は自信を高め、学業に対してより意欲的に取り組むようになるのに対し、順位の低い生徒は順位の高い生徒と比較することで自信を失い、学業に対して意欲的に取り組まなくなってしまうという仮説（可能性）である。その結果、長期的に見れば、順位の高い生徒の学力は上昇し、順位の低い生徒の学力は低下し、その差が広がると考えられる。
- ・ 順位の高い生徒は順位の高い生徒とだけ交流し、順位の低い生徒は順位の低い生徒とだけ交流し、順位の高い生徒と低い生徒の相互作用が生じにくいという仮説（可能性）である。順位の高い生徒同士は学力が高く、相互に刺激し合ったり競い合ったりすることで学力がさらに向上するのに対し、順位の低い生徒同士は、（自信が低く劣等感を感じているため）そのような相互作用は生じにくく、結果的に、順位の高い生徒と低い生徒の学力差が広がってしまう。

問5

【評価の観点】

- ・ 教師ができる工夫を複数挙げて、理由も含めて具体的に記述されているか、また、それらをわかりやすく表現されているかを問う。

- ・ 下記の解答例は、工夫の例であり、複数の工夫が記述されていれば加算して採点する（同じような工夫は加算しない）。

【解答例】

- ・ 順位を伝えるだけでは、自分の強みや弱みを正確に把握できず、その後の改善につなげられない。そのため、できていた点やできていなかった点を詳しく伝え、できていなかった点を復習して、次回に改善できるように促す。
- ・ 順位を伝えるだけでは、その後の改善につながりにくいため、自分の弱い点を確認させ、次回の目標を設定させたり、それに向けた学習計画を考えさせたりする。
- ・ 偏差値の高い学校であれば、他校の生徒を含めた学年全体での学力は高いのに、学校内の順位は低くなるために、生徒は自信をなくし学習意欲を低下させてしまう可能性がある。そのため、学校内の順位が低い生徒に対しては、学校内の順位は低くても、他校の生徒も含めた学年全体では学力が低いわけではないことを伝え、生徒に自信を持たせるようにする。
- ・ 順位の高い生徒は高い生徒同士で交流し、低い生徒は低い生徒同士で交流する傾向が高い。このような生徒の学力による分断は、相互交流による学力の向上を阻害してしまう可能性がある。そのため、とくに順位の低い生徒に対しては、順位の低い生徒とだけ交流するのではなく、順位の高い生徒とも交流するように伝え、授業でも順位の高い生徒と低い生徒が交流して学習する機会を増やすようにする。
- ・ 自分よりもはるかに高い順位の生徒を比較対象にしてしまうと、努力しても追いつけないと思い、努力を抑制してしまう可能性がある。そのため、順位を伝えるだけでなく、自分よりも少しだけ順位が高い生徒を比較対象として意識させ、その生徒を目標に努力するように伝える。